

津島町でハゼ釣りをしているところに吉村さんが現れ、いっしょに釣り糸を垂れたことがある。彼の白っぽいレインコートの立ち姿が妙に目に残る。その時は、同じ小説家で夫人の津村節子さんも一緒だった。彼女にもまた、宇和島で取材した真珠養殖場が舞台の恋愛小説がある。

ある日、吉村さんを

囲み10人ほどが集まり、斉藤鮮魚店の2階

で酒宴を催した。宴も引ける頃、突然明日は河豚が食べたいとおっしゃる。たま親しい料理屋を知っていた僕にお鉢が回り、翌夕、出版社の人2、3人と一緒に出かけた。吉村さんの酒豪ぶりは小説仲間でも関東の雄として知られ、その日も外連味なく杯を重ねられていた。でも、肝には決して

手を付けようとされなかったのがちょっと意外。この席の話で覚えているのは、吉村さんが正岡子規を書きたいと思っていると。そこで僕は「子規の絶筆の字はいいですよね」と話しを向けたが、ピンとこられた様子はなかった。その後、ウイスキーが飲みたいと言われ、とあるバ

司馬遼太郎と吉村昭Ⅲ

ーにお連れした。そこで吉村さんのテンションが上がった。彼は最後にホテルで仕上げの酒を飲むのがお好きとのこと。宇和島のひとつだけの欠点は、ホテルにバーがないと。ここだったその代わりにつってつくと、えらく感謝された。だいぶ後日だが、岩波の「図書」を読んでいると、

そのバー「つくし」のことが書かれているのに出くわし「アッ」となった。フランス文学者にして昆虫マニア奥本大三郎氏である。漱石の小説に出てくる大蜘蛛が彫刻された硯を求めて探し回り、ついに辿り着いたのが宇和島の旧家。その



持ち主に連れられて行ったのが「つくし」なのだ。文中で彼は「銀座にもないモダンで品のある美人姉妹の店」とベタ褒めをしていた。もっひとつ。吉村さんご夫妻は、僕の母方の祖父が看板も出さず家の2階でやっていた骨董屋に、幾度と

なく訪れていた。「日本最後の骨董屋」などと書かれていて驚いたが、今は僕のアトリエなのだ。毎日使うこの古い家の急な階段を上り下りされていたと思うと、ちょっと感慨深い。

ここに登場した斉藤鮮魚店も横堀食堂もつくしも今はなく、司馬さんも吉村さんもこの世にはおられない。おふたりを惹き付け続けた宇和島。そしてさりげなく受け入れる不思議な力を持った人たちも、皆鬼籍に入った。果たして今、そのような人たちを受け入れる土壌はこの地に残っているのだろうか。甚だ心もとないのである。

(一昨年、東京都荒川区に吉村昭記念文学館がオープン。会場、図録に宇和島に関する特設コーナーがある)

(吉田 淳治・画家)